

柳澤敏勝先生 最終講義記録



記録：久保ゆりえ・相良孝雄・藤井敦史

はじめに

皆さん、こんにちは。年度末の大変お忙しい中、お時間をとって頂きまして誠にありがとうございます。私自身はもともと、コロナがあろうがなかろうが、“最終講義”なんていう照れくさい場を設けて皆さんにお話しするという事は、全く考えていませんでした。しかし、社会的企業研究会というボランティアな研究者の集まりで、こういう会を開こうじゃないかとおっしゃっていただいた。これはとっても嬉しいことでありまして、お引き受けさせて頂きました。本当にありがとうございました。

今、司会の相良さんからお話しがあったように、大学へ入ったのは今から50年以上前で、半世紀、明治大学にお世話になっている。その中で教員生活は40年を超えているのですが、その半分近くは“学生部”というところで過ごしておりました。商学部の所属教員なんだけども、他方で、学生部という机の上の勉強“以外の”学生生活をサポートするセクションで20年近く過ごしているんですね。

ですから、僕は明治大学の生活の中で、商学部と学生部という“二重国籍”での生活を送ってきました。

大学行政に関わってきておりますから、その立場から色々お話しすることもできますが、今日は社会的企業研究会がご用意してくださった場ですので、やはり研究についてお話しするのが一番妥当だろうと思っております。

近著に込めた思い

今日お話しさせて頂くテーマは「なぜ僕が今現在、社会的連帯経済について勉強しているのか」ということです。去年の夏、今日ここにご参加下さっている平山昇さんはじめ、柏井宏之さん、樋口兼次先生の三人が共同の編著者になって作った本『西暦二〇三〇年における協同組合』という本があります。これが我々思いもかけず、去年の暮れに、元朝日新聞記者の岩垂弘さんたちがやっている平和・協同ジャーナリスト基金賞の奨励賞を頂戴しました。大変ありがたいと思っています。

その本の序文を、おこがましくも私が書かせて頂いております。共同編集者の平山さんから、「序文は柳澤が」とお話があったわけですが、この本の執筆者の中には、横田克己さん、下山保さん、若森資朗さん、加藤好一さん、さらには堀利和さんとか丸山茂樹さんとかですね、私が足元にも及ばないような錚々たるメンバーがいらっしやいます。

「彼らのうちのどなたかに書いてもらうべきだろう」と平山さんにお話ししたのです。しかし、そうした錚々たるメンバーの方々なんだけれども、「そういう方々に書いてもらうと何らかの“偏り”が出てしまうからそれは困る」と出版社の言い分はそういう話だったようです。そこで序文の執筆を引き受けました。私自身が考えていることを好き勝手書かせてもらうということの了承を得た上で書かせて頂きました。

ごくごくかいつまんで言えば、私自身はこういうふうと考えております。19世紀というのは「市場での交換万能型の社会である」と。しかし、これじゃなかなか人々の生活がうまくいかないということで20世紀になってから、国家による再分配が前面に出てくる社会になる。これも限界にぶつかっていて、21世紀の現在は、“つながり”や信頼のネットワーク、そして互酬性の社会になってくるんだろうと考えております。

しかし、残念ながら、現在の21世紀初めの状況のもとでは、新自由主義という“毒”をまだうまく解毒できていない。新自由主義に代わるモデルがまだ見えていないのではないか、というふうに思います。特に、今日詳しく話をするゆとりは全く無いんですけれども、この日本は先進国の中にあっても珍しいくらいに、新自由主義に“どっぷり漬かっている”。そういう社会なんだろうと思うんですね。

そこから抜け出していく上で社会的連帯経済というのは、とっても重要な役割を果たすのではないだろうかと思っております。このようにして、社会的連帯経済に関心を寄せているのが現在なのですが、なぜそうなったのか、というのをこれからお話しさせて頂きたいと思っております。

学園紛争真っ只中の学部生時代

私が明治大学商学部に入学したのは1969年の4月です。この年は実は東大の入試が無かった年なんです。それだけ、世の中が騒然としていた年でした。特に「70年安保」を控えて、学生運動がまだまだ盛んな頃であって、我が明治大学も、相当程度ガタガタしていた。1969年の4月に入学したその途端、4月28日が「沖縄反戦デー」で大学がロックアウトに

なってしまうんですね。明治大学の学生運動では、たしか「学費闘争」でガタガタしていて、授業なんかできない、ということで大学も閉めてしまっていました。そういう非常に騒がしい雰囲気の中で、私自身の学生生活が始まりました。

それ以来の現在まで半世紀、途切れることなく明治大学商学部に関わり続けてきたということでもあります。そのために、私自身は“明治大学民族主義者”になっておりまして、その点はお許し頂きたいという風に思いますけれども（笑）

私自身がなんで大学院に進学することになったのか。私自身は、東北の片田舎で生まれ育ったこともありまして、右も左も上も下もわからない、完全なノンポリで東京へ出てきました。小学校・中学校の頃に田舎で好きで観ていたテレビ番組があります。「シャボン玉ホリデー」というのがあるんですね。なんで好きだったかという、エンディングにザ・ピーナッツが「スターダスト」という歌を歌うのです。これがですね、田舎に住んでいる僕からすると「都会の風」をもたらしてくれるような、そういう雰囲気だった。おそらく僕がジャズを好きな一つの理由になっているのかもしれないと思います。

ただ、そうは言っても、強い憧れをもって東京に出てきたか、というとそういうわけではなかったです。

一つの大きなきっかけになったのは、「土曜集会」です。東京へ出てきた当時、新宿の西口の地下は“西口広場”と言って、ここで毎週土曜日フォークソング集会、反戦集会が行われていたのです。田舎からぼっと出の私にとってみると、大変強烈な印象であったんですね。これが、こういう運動に私自身が関心を持つようになったおそらく最初のきっかけだったのではないかと思っています。

そして大学3年生の時に「あさま山荘事件」がありました。これが僕にとって非常に大きな影響を与えたと思っています。ここについては後で少しまたお話しします。

その「あさま山荘事件」を経て、1973年の春に卒業して就職する“予定”だったんですね。1973年の春っていうのはまだオイルショックの前ですから、日本経済は絶好調。その当時の大学生は、大学3年の暮れまでにはだいたい就職が決まっていました。ただ私は、アルバイト先で労働組合に関わっていたものですから、就職というよりは、もう少し労働組合について勉強してみたいなど。こういう願望みたいなものが生まれてきたんですね。これが、大学院に進学する動機になりました。

ただ、大学院に進学するための勉強を全くしていなかったんです。学部の4年間のうちの2年間は、学費闘争だとかなんだかんだがあつて試験が全く無く、レポートを提出して成績評価をしてもらうという状況でした。そのくらい大学の中は混乱していましたし、私自身も全く勉強していなかった。

特に今でもしっかりと覚えているのは、大学4年生の時はおそらく授業に出たのは1回だけです。全然自慢にもならないんですけども（笑）。それくらい勉強しないわけですから大学院受けるっていったって、力が無いわけですよ。ですから、大学院受けるにあたってちゃんと勉強しなきゃいけないってことで、1年留年するんです。学部卒業まで5年かかっ

たということです。

その当時、知り合いの大学院生がいて、その方に話をしたら、明治大学商学部には栗田健という、とんでもなくすごい先生がいるということを教えてもらいました。その当時はどれほどとんでもなく素晴らしい先生なのかっていうのは、全く知らなかったんだけども（笑）

ともあれ、大学院への進学を目指して1年留年して勉強して、なんとかかろうじて大学院に合格しました。

大学院のマスター時代：労働者自主管理に対する関心の高まり

合格したのは良いけれど、マスターの時はあまり真面目な大学院生ではありませんでした。労働組合について勉強してみたいという思いはありましたが、研究生活を続けていくとか、大学の教員になるとかは全く考えていなかったんです。そのため、マスターの時の勉強には、いまいち熱が入りませんでした。

ただ、私のお師匠さんである栗田健先生は私の話を聞いて、その当時、新進気鋭の熊沢誠先生のご研究と、ユーゴスラビアの労働者自主管理について研究した方が良いんじゃないかというアドバイスをしてくれました。おそらく栗田先生は、私の中にアナルコサンジカリスト、無政府主義労働組合主義者のような発想があるんじゃないか、ということに気付いてくれたんだと思います。まさに的確だ、と言ってもいいかもしれません。

私自身はそんなこと全く分かっていなかったけれど、今考えると、おそらく先ほど話した「あさま山荘事件」が結構大きな影響を与えていたんじゃないかと思います。

連合赤軍という前衛党と軍隊を一緒にしたような新左翼の一派が起こした事件ですが、政党にあまり信頼をおかないという私の中の想いを膨らませたのは、おそらくこの「あさま山荘事件」だったと思いますね。

その当時、私は学生運動をしていたわけではないんだけど、一丁前に、この事件で「状況が重くなったなあ」と。そういう想いを強く抱いたことは間違いありません。前衛党だけでは、やっぱり世の中良くならない。「日々の人々の生活を、いかに充実させていくかということこそ、次の時代の準備になっていくんじゃないか」という考えに繋がりました。この考えは今でも変わっていません。

こうした考えに影響を与えたもう一つが、先ほど言った熊沢誠先生です。熊沢先生が30代のはじめくらいだったと思いますが、『労働のなかの復権』という本を書かれているんです。三一新書です。とっても感動した覚えがあります。これが、僕がものを考えていく一つの原点になっている。

「はたらく人たちが主人公である」ということを、その当時のイギリスの労働組合の研究を通じて主張されていた本です。この三一新書、当時300何十円だったんじゃないかと思うのですが、そのくらいの値段で買った本が、今はAmazonで1万円を超える値段で取り引きされているんですよ。この前見てびっくりしました。

大学院のドクターへの進学と研究者としての目覚め

そういうことで、マスター時代は労働者自主管理についての勉強を始めたんですが、研究生活を続けていく具体的な展望を持っていたという訳ではないですし、また、私自身の勉強を続けていくための経済的な条件は全く良くなかった。そのため、ドクターに行くということは全く考えていなくて、マスターが終わったら田舎に引っ込んで就職でもしようかと考えていました。

田舎に引っ込もうと思っていたその矢先に、栗田先生と非常に縁の深かった先輩の大学院生が引き留めてくれて、「奨学金で飯食えるぞ」と囁いてくれたんです。それが今に繋がっている。大方の大学院生からすれば、とんでもない噴飯ものだと思うんですけど、「そうか、そういう道があるのか！」と、新しい発見がそこにありまして（笑）

それで、ドクター試験を受けるということにしたんです。食い扶持を確保するためにドクター試験を受けるというとんでもない動機で、ドクターに進学したっていうのが実態であります。

ただ、勉強が全然足りてないわけです。その当時は今と違って、ドクター試験を受けるためには第一外国語と第二外国語の試験を受けなきゃいけない。第二外国語は僕の場合フランス語でしたが、学部の2年生の時までちょっと勉強しただけにすぎない。

さっきも言ったように、学部の時代はまだ大学がガタガタしていましたから、全然勉強もできていなかったわけですよ。受験しようと思ったんだけど、受かる保証は全く無い。それどころじゃない。受からないのが当たり前だろうというくらいのレベルでした。

けれども、その「奨学金で飯食えるぞ」とささやいてくれた先輩が、たまたまフランスに留学していて、戻ってきたばかりだった。フランス語が堪能な方だったんですね。この方のもとで、1カ月特訓を受けたんです。

それで、かろうじて合格できた。と言っても、とっても恥ずかしい話で、その当時のドクター試験では、第二外国語は辞書持ち込み可でした。これが幸いしたんですね。

フランス語は英語と同じような構造なので、そんなに難しくないのだけれども、単語の意味が全然わからないんです。だから、どうしたかという、試験が始まって最初から最後まで辞書のページをひっくり返す、そういうことで時間を過ごしたということです。だから、よく合格できたなど今になっても思います（笑）。ともあれ、なんとかドクターに入ることが出来ました。

ドクターコースに進んだのは、私にとって大きな転機となりました。当時、今も親しい友人で、早稲田に通っていた院生がいます。この人が3年間授業料を払わずに栗田先生の講義に潜りで入ってきて、その彼と一緒に、栗田先生の講義を受けていたことが、私にとって研究は面白いものだと思わせてくれました。

当時、栗田先生は、『現代労使関係の構造—イギリスにおけるその展開と破綻』（1978年）を執筆中で、その原稿を私たちに読ませて、私たちがどう考えるのか次々と問われました。

その中で、ものを考え、組み立てていくことがこんな面白いものかと初めて感じました。そこから、しっかりと勉強・研究しなければならないと思いました。こういう風に考えると、熊沢先生からは、直接、手ほどきを受けていたわけではないのですが、私にとっては、熊沢先生と栗田先生が、研究上のお師匠さんだったと言っていいと思います。

このようなこともあり、大学院時代は、栗田先生のご紹介もあり、ユーゴスラビアの労働者自主管理の研究を進めました。1970年代は、日本も景気が悪くなるなかで、倒産する企業が次々出てきました。そこで労働者自主生産闘争があったわけです。パラマウント製靴やペトリカメラなどの試みは、自主管理の研究を進めて行く上で、大きな支えにもなったと思います。

労働者自主管理から労働者協同組合へ

しかし、ユーゴスラビアの労働者自主管理の研究は、そう簡単ではありませんでした。一つは、スラブ語がわからず、言葉の問題がありました。私は英語とフランス語に頼るしかないで、それでは研究していく際には十分ではありませんでした。

もう一つは、日本の労働者自主管理の研究蓄積が少なかったことです。特に伝統的左翼の一部からは、労働者自主管理のあり方がかなり否定的に見られていましたので、そのことを考える日本の研究者も非常に少なかったのです。その中で、独学に近い形で労働者自主管理に関わる勉強を進めざるを得ませんでした。

最後に、個々の企業での労働者自主管理がうまくいっても、それが国民経済レベルで見た時に、個々の自主管理をどのように繋げていくのかということが分かりませんでした。その当時は、ユーゴスラビアやハンガリーなどで「社会主義市場経済」という考え方がありましたが、これもよくわかりませんでした。これらのことがあり、労働者自主管理の勉強・研究が壁にぶつかる訳です。

壁にぶつかった時に救い主になってくれたのは、その当時の東大社研の戸塚秀夫先生でした。とても偉い先生なので、あまり交流があったわけではありませんが、東大社研で開かれていた「労働問題研究会」に、栗田先生との繋がりもあって出入りさせて頂いておりました。そのときに戸塚先生から、1970年代のイギリスの自主生産運動や労働者協同組合運動を勉強したらどうかと勧められました。これが労働者協同組合に関心を持つきっかけとなったのです。

1970年代のイギリスは、日本と同様にオイルショック後の景気後退に伴う企業倒産がいくつもあって、そのうちのいくつかでは、自主生産闘争から労働者協同組合に形を変えていく試みがあったことが、調べる中で分かりました。

代表的事例は、スコティッシュ・デイリー・ニュース (Scottish daily News) という新聞社や、メリデン・モーターサイクル (Meriden Motorcycle) という自動車会社などです。当時、労働党が政権を握っていたのですが、その産業大臣をしていたのが、トニー・ベン (Tony Benn) という非常に有名な左派政治家でした。この大臣が音頭を取り、ベンの協同

組合（Benn's Coop）と呼ばれる労働者協同組合が推進される取り組みが生まれます。その典型として ICOM（Industrial Common Ownership Movement＝産業共同所有運動）という組織が出てきて、面白い試みが行われていたと感じました。その時に、ICOM のような中間支援組織が日本でなぜ発達しないのかを疑問に持っていました。

日本労協連との出会い

こうしたイギリスへの関心から、日本に眼を転じてみると、日本にも実は労働者協同組合の動きがあるということが分かってきたんですね。日本労働者協同組合連合会、当時は、中高年雇用福祉事業団と言っていました。こうした動きがあることがわかってきました。先ほど、相良さんから話がありましたが、日本労協連の第 1 回の協同集会は明治大学和泉校舎で開かれたんですね。実は、その前の年に、伊東か熱海でプレ集会があり、専修大学の内山哲朗さんと一緒に出掛けて行ったんです。そこで、永戸さんや、もうお亡くなりになった菅野さんにお会いして、色々お話をしまして、その結果、協同集会を明治大学でお引き受けしようとなっていました。

しかし、これには、後日談がありまして、当時、明治大の和泉キャンパスは、新左翼の一つの拠点だったんですね。当時、新左翼についてよく知らなかったのも、労協連の母体となった全日自労との間に思想的対立があることも知りませんでした。

そのため、キャンパスを牛耳っていた側から「俺の庭で何をやるんだ」とクレームが付いたんですが、「大学という公の広かれた場で、誰が何を話そうと良いだろう」と言って突っばねたんです。今から考えると、恐ろしい話ですが、知らないがゆえにできたことだったかもしれませぬ。

いずれにせよ、この頃になると、労協連の動きと並んで、ワーカーズ・コレクティブという取り組みもなされていることも徐々に分かってくるようになりました。

その上で、このように労働者協同組合に関心を持っていた私が、どのように社会的経済や社会的連帯経済といったものに関心を持つようになったのかということ、残り 10 分くらいでお話ししたいと思います。

社会的経済や社会的連帯経済についての関心の高まり

栗田先生のおかげで、1980 年に明治大学に職を得ることが出来たのですが、1990 年代以降、今日ここにおられる中川雄一郎先生や富沢賢治先生と一緒に研究チームを作って労働者協同組合の研究を始めました。その研究の一つの成果が『社会的経済』という本の翻訳や『労働者協同組合の新地平』という本になっていきます。これが、私自身、社会的経済や社会的連帯経済というものに関心を持つきっかけになるのですが、正直を言うと、社会的経済については、全く何も知りませんでした。

この研究チームに居た立命館大の佐藤誠さんがイギリスに留学していた時に “Social

Economy”という面白い本があると紹介してくれて、それじゃ、皆で翻訳してみようということで翻訳したのが『社会的経済』でした。また、この研究チームに居た石塚秀雄さん、内山哲朗さん、それに僕とで10年くらい後に翻訳を出したのが『社会的企業』でした。その後、さらに内山さんと2人で『欧州サードセクター』を訳したんですね。後で知ったことですが、立教の北島健一さんが『社会的企業』を著者のドゥフルニさんと連絡を取って翻訳しようとしていたそうで、私たちは、そんなことは知らずに日本経済評論社を通して向こうの出版社と話をし、翻訳してしまったので、申し訳ないことをしたなと思っています。もう一つのきっかけは、1997年にイギリスで政権についての労働党のトニー・ブレアによる「第三の道」政策です。ブレアは、従来の労働党による完全雇用政策を大きく転換して、社会的企業や社会的経済を重視する政策へとシフトさせたんですね。こうしたブレア政権による社会的企業を含んだサードセクターへの注目というものが、私自身が社会的経済や社会的連帯経済に関心を持つもう一つの大きなきっかけになっています。この「第三の道」政策が持っていた意味については、今後、もっと研究を深めていきたいと考えています。

更に、もう一つ付け加えるなら、GSEFへの参加も自分にとって社会的連帯経済を研究する上で重要なきっかけとなりました。丸山茂樹さんや若森資朗さんが進めていたソウル宣言の会の方達と知り合うことで、2014年にソウルで開催されたGSEFに参加できたことは重要な出来事でした。

当時、協同組合学会長を務めていたことから、ソウル宣言の会の団長を務めさせていただくことになり、また、当時GSEFの事務局に関わっていた金亨美さんから頼まれて、少し焦りましたが、プレ集会では乾杯の御挨拶を英語でさせてもらうといったこともありました。こうした御縁があって、その2年後のモントリオール、4年後のビルバオで開催されたGSEFにも、ソウル宣言の会の皆さんと一緒に参加することができました。

一貫した問題関心と今後の抱負

このように、労働者自主管理から労働者協同組合、そして社会的経済、社会的連帯経済へと研究の関心が移ってきた訳ですが、一貫していると思っています。

「働く人たちが自発的に関わって、自主的に運営していく」というあり方に、ずっとこだわり続けてきたと言っていいかもしれません。

そういう私が、これから何を勉強していくかということについて一つだけ申し上げると、4月から、今日ここに来られている山崎精一さん達と明治大学の研究チーム「国際労働運動研究ユニット」で御一緒させていただく予定になっております。ここで、社会的連帯経済について、さらに勉強していきたいと思っています。特に、カール・ポランニーについてちゃんと勉強しようと考えています。

ちなみに、かつてカール・ポランニーの『大転換』を訳した翻訳者グループの一人が長尾史郎さんで、彼が明治大学の学生部長を務めていた当時、襲われて大怪我するということがあ

りました。

それから、国連を中心とする国際的な舞台で社会的連帯経済についてどのような議論がなされているかをしっかりとフォローしていかなければいけないと考えています。

特に、今の日本政府のような SDGs をビジネス・チャンスと捉えるあり方については、これを何とか変えていかないといけないのではないか、そのための勉強はしていくつもりです。そもそも、勉強したいというだけでなく、68歳の時に申請した科研費がなぜか通ったので、今後数年間はしっかり研究を続けていかななくてはいけないし、まだまだ引退はできないなと思っています。

さて、これで最終講義を終わらせてもらいますが、ゼミの OBOG の諸君には、あまり知らない話も多かったかもしれません。私がこういう研究関心を持ちながら大学での教育に携わっていたということを知ってもらえればと思います。

先ほども申し上げましたが、私自身としては、一貫した問題意識で研究を行ってこれることができて、大変に幸せな時間を生きていくことができたと思っています。

今日お集まりいただいた社会的企業研究会の皆さん、ゼミの OBOG の諸君、それ以外にも沢山の方々の支えがあったからこそ、ここまでやってこれたのだと思います。

そして、最後になりますが、改めて、皆さんに感謝を、非常に大きな感謝を申し上げて、今日の話を終えたいと思います。

最後までご清聴ありがとうございました。